【オープニング】

ていた頃だった。久々に開いたメールボックスに放り込まれていたそれに、だらけ切 っていた脳味噌は不本意な覚醒を余儀なくされたのだ。 奇怪なメールが届いたのは五月の初旬、まだゴールデンウィークの魔力にとらわれ

「You have control ゕレ〜」 題名からして奇抜でさらに目を引くのは、送り手のメールアドレスだ。アドレスは

受信、つまりは此方のアドレスとは一字一句一致している。同じメールアドレス、持 っている人間は一人しかいない。そして最もおかしな点が、 日付だ。

愉快犯の気まぐれな退屈しのぎだろうと、振り払う事は簡単だ。だが……件名にかか 「2041年……」 いやいやいや、さすがに首を振って状況を否定する。そのままバグか何かだろうと、

れた文章が、私にこの狂言を振り払う決心を持たせなかった。

五月病に負け、日々を自堕落に過ごしている自分へ

自然と本文の方へ流れて行ってしまうのだった。そこにはこのようなことが書かれて ルアドレス、日付、 『突然の連絡に驚かせてすまない。 だがどうしても伝えなくてはならないことがあっ 文自体に意外性はない、この時期は誰でも心当たりのあるような問題だ。だがメー 件名と重なった偶然を、袖にもかけぬ人間はいな 61 私の視線は

て、今回こうして未来から連絡を取っている。

出来れば無駄なことは避けたい。分かってくれ』 好きな人の名前とか書き連ねて信じてもらうだけだが、今はなにぶん時間がないから か、実は好きどころか苦手だった習い事に6年も無駄に通っていたこととか、 言うのなら君が6歳のころ社会科見学で行った博物館に一人で取り残されたことと そう、私は20年後の君であり、君が陥る未来の一つの形だ。もし信じられないと 今君が

成る程焦燥感だけは伝わってくる文面から話にだけは付き合ってやることにする。

学園祭についてだ。誕生日プレゼント選びに2時間かけた君が決められずにいるのは 身に染みて分かるが、端的に言う、学園祭に行くんだ。詳しく書くと長くなるが、行 かない道を決めた君が迎えるのは――死だ』 お互い余計なダメージを伴うのは避けたい。 『伝えたいことというのはほかでもない、その時間君が行くか迷っている専門学校の

こうして文章を送っているアンタは何者なんだ。 ここにきてさらに突拍子もない予言に私は面食らった。死ぬだって? だったら今

だが死とは一瞬で訪れるものとも限らない。君に訪れるのはそういう死なのだ。 めることだけだ。時間がないという意味はそこにある、私はこのメールを読んだ君に 君が死を避けるために出来ること、それは何でもいい、君自身で自分の行く末を決

ぬだなんてとんでもない、とうとう馬脚を現したな、などと考えているだろう?

どういう行動を起こすのか、それを決めるだけの時間をとにかく与えたいのだ。

わるのかも分からない。だがまだ君には時間がある。未来からの教訓を過去の自分に い か、それだけを考えてくれ。私が望むのはそれだけだ。君が変わって、私の今が変 将来のことすべてに目を配れと言っているのではない。今は学園祭に行くか行かな

与えるくらいやっても、 罰は当たらない筈だ』

『君が今の可能性と危機を、上手く利用できることを願って メールの最後はこのように締めくくられていた。

You have control _』

|・・・・・また|

の上に寝転がった。ベッドの上には未来の私とやらが予言した通り、専門学校の学園 また現れた謎の文章まで読み終わり、張りつめた肺の空気を吐き出した私はベッド

祭の案内が置きっぱなしになっていた。

くと言っただけで後ろ指を指されるような、自分が自分に負い目を感じるような、ア ……看護だの歯科衛生士だの、そう言った誉められる類の学校ではない。むしろ行

ニメと声優という文字が輝く〝素晴らしい〟学校だ。

れる。 のは自分が望んだ未来ではない。自分を納得させようとする度この敗北感に付き纏わ 今の学力であれば、大学もそれなりのところに行けはするだろう。だがそこにある

君が今の可能性と危機を、上手く利用できることを願って

自分の未来を掴むために、私は……

(オープニング作成/今泉宥冶)

分なんだろうか。 ①学園祭の日付を覚えた。しっかりと頭にそれを焼き付けたが、本当にそれだけで十

●念のためにスマホを取り出し、日付をカレンダーにメモする。→③

●しっかりと記憶しているから大丈夫だろう。→②

②学園祭当日一一

まだ間に合うと確信する。急ぎ足でバイトへ向かった。 もう時間だ。行かなければ。鞄に必要なものを詰めて家のドアを開け、時計を見て

そういえば、何か一一。まぁ気のせいだろう。→⑤

③学園祭当日一一

見るとあの時のメールを思い出す。あれは本物なのだろうか。 スマホのカレンダーを再確認すると鞄に荷物を詰める。鞄に入れたパンフレットを

れんがを……と思ったところで聞き覚えのある歌声に気がつく。歌声の方へ向かうと、 時間を確認して家を出る真っ直ぐに学校に向かう。確か、駅を出てまっすぐ進み赤

それは初音ミクの歌声だった。

●初音ミクの3Dライブイベントへ向かう。→④

[●]余裕を持って真っ直ぐ学校へ向かう。→⑦

④良かった。その一言に尽きる。『ルマ』からの『すろぉもぉしょん』で盛り上がり、 コーイエーイ‼⊠でも、娘娘とか、やぱっぱっぱていう歌詞の曲は知らなかったな。 『ウミユリ』からの『ヒバナ』。最高以上の言葉が出てこない。初音ミク最高。サイ

時間を確認する。開始時間は過ぎていたので急いで向かおうとするが、あなたの視

あとで調べておこう。あ、学園祭。

界に大泉洋が入ってきた。)大泉洋を追いかける。→⑨

学校へ急ぐ。→28

⑦目指すべき建物が見えてくる。学生らしき人達と一緒に専門学校の入り口から入っ た。後ろから誰かに声を掛けられた気がする。

●振り返る。→⑩

●自分の気のせいだろう。→®

⑧ふと外を見るとあの「TEAM NACS」に所属している大泉洋さんの姿が目に映っ

た。

●大泉洋さんを追いかける。→⑨

●いや、今は学祭を楽しもう。→⑫

⑨あの大泉洋さんと二人で写真を撮ってもらった。 もう自分の人生に悔いはないな。

今日はこのまま帰ろう。学祭も今の自分には些細なこと。今後も明るい未来が待って

いるに違いない。

⑩後ろを振り向くと同級生の女の子の姿があった。偶然出会った同級生は将来声優に なりたいと言っていたことを思い出した。

「自分一人だと心細いし、 一緒に学祭を回ろうよ」→⑪

ける。 ①同級生と一緒に学園祭を回ることにした。学祭のイベントを一覧できる看板を見つ

●スリルが楽しみたいのでお化け屋敷に向かう。→⑫

)もう少しでライブが始まるようだ。全力でライブを楽しもう。→®

●お腹がすいた。屋台を回りたい!図⑭

⑫同級生とお化け屋敷を楽しんだ。かなり出来がよく、正直怖かったところもあり同

級生と二人で盛り上がっていた。

)同級生がアフレコ体験に興味を示していた様子だったのでアフレコ体験に向かう。

↓ (15)

)驚いたり声を上げたりして体力を使ってお腹が空いた。同級生を屋台に誘う。→⑭

生と目が合うと二人で声を上げて楽しむ。ライブの時間はとても充実していた。 ③大音量の音楽が歓声を誘う。それに応える様に観客の声が大きくなっていく。 同級

)お化け屋敷に興味が引かれたので同級生とお化け屋敷に向かう。→⑫

)同級生がアフレコ体験に興味を示していた様子だったのでアフレコ体験に向かう。

④焼きそばやたこ焼きが熱々の鉄板で焼ける匂いが、階段を登ると段々近づいてくる。

綿飴、 階段を登り切るとそこに香ばしい音が聞こえてきた。空腹を誘う。他にもタピオカや 半円形の大きなチーズを溶かしたラクレットなどがあり、同級生とはたこ焼き

と焼きそばを買い二人で分け合った。

)同級生がアフレコ体験に興味を示していた様子だったのでアフレコ体験に向かう。

↓ (15) とだったので行くことにした。 この時間帯にもライブがあると出店の学生から聞いた。 ↓ (18) 是非、 来て欲しいというこ

⑤アフレコ体験の場はとても輝いて見えた。見たことのない機材や様々な楽しそうな

学生がいて、どこか自分には別世界に見え、一歩踏み出せないでいる。

たい人!!凶と声が掛かる。 同級生がやる気に満ちているのも原因なのだろうか。そこに「アフレコをやってみ

●いや、自分は……→⑥

)黙って手をあげる | | →⑩

えた。彼女の声をこの先もずっと聞いていたいし、他の人にも届けたいと思う。 級生のアフレコを聞けたこと。彼女の声は体験に来ていた人の中で一番魅力的に聞こ ⑯自分は最終的にアフレコ体験はしなかったが、とても良いことはあった。それは同 学園

祭の帰り道は彼女と楽しく話しながら帰った。彼女と別れた後に本屋に立ち寄り……

文庫本を手に取る。

声優雑誌を手に取る。

に進路相談をする。将来やりたいことを聞かれ…… に入学した後の授業のイメージが鮮明にできた。この高揚感のまま自分は学校の先生 ⑪アフレコ体験をした時の興奮がまだ収まらない。アフレコ体験をした時にこの学校

●自分は同級生の支えになりたい。

●声優になりたい。

生と目が合うと二人で声を上げて楽しむ。ライブの時間はとても充実していた。 ®大音量の音楽が歓声を誘う。それに答える様に観客の声が大きくなっていく。 同級

ライブを楽しむ。→⑨

●もう一度、同級生を見る。→⑳

●外を見る。→②

彼女を置いて走り出した。→⑨ ②外にあの水曜どうでしょうに出演していた大泉洋さんが目に入り、ライブの最中に

きながら楽しむものだ。なので、 ②お化け屋敷があったが一人では入る気にはならない。お化け屋敷は誰かの悲鳴を聞

ライブへ向かう→②

出店に向かう→

分の声もそれに交じり合わせていく。とても、楽しい時間を過ごした。 ③大音量の音楽が歓声を誘う。それに答える様に観客の声が大きくなっていく中で自

●声を出したのと興奮でお腹が空き出店に向かう。→②



分はたこ焼きにラクレットの溶かしたチーズをのせて食べた。 他にもタピオカや綿飴、半円型の大きなチーズを溶かしたラクレットなどがあり、自 に近づいてくる。階段を登り切るとそこに香ばしい音が聞こえてきた。空腹を誘う。 砂焼きそばやたこ焼きが熱々の鉄板の鉄板で焼けた匂いが、階段を登っていくと段々

)お腹が一杯になり満足したので、ライブに向かう。→⑰

ふと窓の下を見た。→

@焼きそばやたこ焼きが熱々の鉄板で焼けた匂いが、階段を登っていくと段々近づい

焼きにラクレットの溶かしたチーズを乗せて食べた。 てくる。階段を登り切るとそこに香ばしい音が聞こえてきた。空腹を誘う。他にもタ ピオカや綿飴、半円型の大きなチーズを溶かしたラクレットなどがあり、自分はたこ

どうやら、ライブを楽しみすぎたらしく、学園祭がもうすぐ終わる時間になったの

で帰ることにする。

楽しい学校だと思い、自分はこの学校への入学を考え始める。

考えずに走り出した。→⑨ 29外にあの「騙し絵の牙」で有名な大泉洋さんがいることが目に入ると、自分は何も

②大音量の音楽が歓声を誘う。それに答える様に観客の声が大きくなっていく中で自

分の声もそれに交じり合わせていく。

とても楽しい時間が過ぎていき、いつの間にか学祭が終わる時間になる。

充実した

一日に満足し学校の自動ドアを通るのであった。

③学校の中に入ると沢山の生徒や学生達で賑わっていた。その中を歩いている同級生 の女の子を見つける。

●声をかけて一緒に屋台に行こうと言う→⑭

)声をかけずにそっとしてあげ一人で屋台に向かう。→②

エンディング1】

テレビを点ける。習慣づけでループする私の一日の終わりだ。ビールを手に、味気な 誰も居ない部屋にただいまの言葉も無く、仕事終わりでくたびれた座布団に座って

『……それで、どうせ人生一回きりだからやろうと思ったんです。ベタな話ですけど』 テレビの向こうで夢を語る少女の姿に、嫌悪感を覚えるようになったのはいつから

晩飯を口にする昨日と同じ今日。

だろうか。不快なテレビを消し、晩飯に意識を集中させる。

をビールで流し込むと言う最低の晩飯を片付ける頃には、私はすっかり疲弊して畳の だが一度現れた負い目は飯の味にまで作用してきて、乾いた糊のようになった白米

そうして思い出すのは、決まってあの妙なメールなのだ。

上に寝転がっていた。

挑戦を捨て安寧を得て、これで良かったのだと思うたび、あのメールが邪魔をして お前には他の道もあった、ここ以外の場所にもいられた筈なのに……それを拒

絶した自分はなんて臆病なんだと、過去の自分が責め立てるのだ。それに対抗するた めの私の希望ある未来といえば、大学に行って普通に就職した、それだけ。本当にそ

文にもしたくない。これではまるで私の人生は れだけだ。 ない、書きたくなかったのだ。こんなしょぼくれた、 未来の自分が未来の状況について書きたがらなかったのも分かる。 一行で終わってしまう半生など 書けない のでは

死人と変わらないじゃないか。

まだ、やり直せる道があるとしたら。

あの時のメールが本物だとしたら。

書くのは使い古した自分のメールアドレス。たとえ今の私自身が何も変わらないのだ

みで億劫さを訴える腕をなんとか動かし、私はスマホを手に取る。送り先の欄に

自分と同じ存在が報われない人生を送るのを、私は良しとはしない。

送る。 いつか親切な人から言われた、あの忘れがたきメッセージに思いをのせて私は文を

You have control— 操縦者は貴方です―― -未来を決められるのは、君だけだ。

——LOOP END——

【もう一度最初から始める】

(ゲーム本文作成/小池祐樹 エンディング作成/今泉宥冶)

(エンディング2)

学祭を経て、 札幌デザイン&テクノロジー専門学校に入学することを決めた。

方々で、努力する方向を間違わせない。級友は同じ目標を持った人ばかりで、 この学校は夢を追うには最高の環境だ。先生、講師の方々は第一線で活躍してきた 励まし

合いながら、時には、厳しいことも言いあった。「こいつには、負けたくない」「も

誰かの言葉だが、

っと上に行きたい」そんな思いは、努力の量を増やしてくれた。

「夢を掴むためには、正しい努力の量を正しい方向性で行わなければ叶わない」 本当にその通りだと思う。

学校は、私を大きく成長させてくれた。

私の行動は実を結び、声優として仕事をもらうことができた。

やラジオドラマの仕事に参加することができ、小さい頃からの夢は叶ったと思う。 アニメの声当て、海外映画の吹き替え、ドキュメンタリー番組などのナレーション

の友人は声優になることを諦めたが、今では家庭を築き、とても幸せそうだ。あの頃 の思い出を語る友人の表情は、とても晴れやかだった。 たとえ、夢が叶わなかったとしても、経験が糧となり人生を豊かにしてくれる。私

自分のやりたい気持ちを押し殺して生きていたら、きっとつまらない人生になって

いただろう。

自分の中に挑戦したい気持ちが宿っているのなら、信じて行動に移して欲しい。

You have control— -操縦者は貴方です― 未来を決められるのは、 君だけだ。

---HAPPY END-

【もう一度最初から始める】

(ゲーム本文作成/小池祐樹 エンディング作成/下山楓雅)

エンディング3】

学園祭では色々あったが、自分の思う理想や夢はそこには見出せず。一度原点に返 自分が真にやりたいことは何かを模索することにした。

学園祭終了後の帰り道で、自分が何を目指し、どこに行き付くのか。そんな答えの

出ない思考を延々と巡らせ、私は歩き続けた。

のかさえ分からなくなっている。 この先、一体どうなるのだろうか……。軽い溜息を零し、 私は今や自分が何を志し、この札幌デザイン&テクノロジー専門学校に足を運んだ 周りを見渡す。

周 私にはその目的地さえ、見失ってしまったのだ。私は、ただ俯きながら歩く。 りには大勢の通行人がおり、その一人一人が、自分の目的地に向 かい歩い

その時だった。横断歩道を渡ろうとした時、すでに信号は赤く染まっていた。

ブーというクラクションの音で我に返り、音の方へ視線を向けると。そこには、高

速で迫ってくる車がいた。

そうか、思い出した。一瞬止まった思考が再び動き出した。

何かを目指してここに来たのではない、何か目標を見つけるために来たんだ。

その瞬間、衝撃と浮遊感が体を襲い。バンッと、鈍い音が周囲に響く。

私の視界は光を奪われ、 永遠の暗闇へと引きずり込まれた。

——BAD END——

【もう一度最初から始める】

(ゲーム本文作成/小池祐樹 エンディング作成/西館俊朗)

【エンディング4】

この札幌デザイン&テクノロジー専門学校に入学してから色々なことがあった結果

私は今、学校はなんとか卒業したものの、正直五月病でずっとやる気が出ないため、

自堕落なニート生活を送っている。

というか在学中、彼女と同棲するようになってからずっとこの調子だ。

だが心配は要らない。 困ったもんだが、やる気が出ないのは仕方がない。

専門学生時代に出来た彼女のヒモとして、養って貰っているからだ。

彼女の方は今、大人気声優 森田 ショコラ」として、 だから私を養うだけの収入は得られている筈だ。 活動している。

一では愛しい貴方、行ってきますので、大人しく待っていて下さいね」

一ああ、行ってらっしゃい」

彼女は私の身の回りの世話をすると、ニッコリとした笑顔で私に微笑みかけて、出

勤すべく私の部屋を後にした。

* *

*

何故なら、彼女は漸く目的を果たすことが出来たのだから。 彼女は身支度を整えると、上機嫌でほくそ笑みながら、二人の愛の巣を後にした。

難い事態である。

彼女にとっては、想い人に何処の馬の骨とも知れない変な虫が付くのが、一番耐え

必要不可欠。 それを防ぐ為には、 想い人を自分に依存しなければ生きていけないようにするのが

毎日薬を食事の中に混ぜ混む為、 手間は掛かったが、幸い想い人はそれに気付く様

子さえ無かった。 全く不用心にも程がある。

だがそのお陰で遂に、想い人は自分が養わなければまともに生きてはいけない程の

廃人と化した。

つまり、漸く彼女は想い人を独占することに成功したのであった。

(キヒヒ……、これで、ずっと私の物ですわ)

だった。 想い人は、自身の五月病が彼女の仕業だと気付かぬまま、日々を自堕落に過ごすの

---PSYCHO END ---

【もう一度最初から始める】

(ゲーム本文作成/小池祐樹 エンディング作成/林智大)

エンディング5】

学園祭を経て、私は入学を決意した。

ば必ずしも成功するわけでは無いのはわかっているし、入学を決めた大きな要因が自 エンターテイン メントいう不安定な業界を目指すことに不安はあった。学校に行け

玉置さつきがいるから。

分でも呆れてしまうほど不純だったからだ。

も頑固でどうしようもなかった。 そんな動機で進学を決めてはいけない、けれども私の意思は自分が思っているより 寝ても覚めても彼女の姿が脳裏をよぎる。

て仕方がなくて、それを知る術を私は筆を握ることでしか得られないと思った。 れど、イラストや小説も少しは書いたことがある。 抑えられない創作意欲が、 私の知り得ない彼女を表現したがった。 うちも外も彼女の全てが 志望は 声 知りたく 優だけ

私の高校生活は一瞬で過ぎ去り、一目惚れした女の子に引き寄せられて私はあの学

と現実の乖離なんて考える余裕なかった。

校に入学した。声優コースと迷ってノベリストコースを選択したが、そこに後悔はな

知的好奇心が抑えきれなくなって告白を受け入れたのだと、 入学して間も無く私は玉置さつきと付き合い始めた。猛烈なアタックを続ける私 後に教えてもらっ

るのだ。 き合ってよく分かった。決して運命などではなく内面の相性がカチッと合わさってい 多分、私と彼女の創作のスタンス、表現の仕方が似ているせいだと思う。それは付 私の創作した玉置さつきと現実の玉置 さつきには怖いくらい差異がなかった。

華する事で快感に似た達成感があった。それだけでノベリストコースを選択してよか ったと思うし、出来栄えだって学校内の評価に留まらずネット上でも話題になる程だ 私の描いたキャラクターに彼女が声を吹き込んで、生きているキャラクターへと昇

論するまでもなく決まった。 その反響を受け、私とさつきは学園祭で作品を作ることになる。テーマは二人で議

不安や恐怖で手を伸ばせない人に勇気を与える、幸せな未来へと後押しできる作品。

『You have control』

タイトルは私が提案した。

出会うこともない、退屈な人生になっていただろう。現在と比べれば確かに、死んで あの時の手紙……未来からの手紙が無ければ私は学校に入学しなかったし彼女と

いるも同然なのかも知れない。

私に手紙が必要だったように、 私達の作品を必要にしている人がきっといる。

だから作品を作るんだ。

——TRUE END ——

【もう一度最初から始める】

(ゲーム本文作成/小池祐樹 エンディング作成/宮本大地) (監修:島木花菜)